試論安部公房 1950 年代作品的懷疑性
—以東歐經歷的表象為例—

解放

東京外國語大學博士生

摘要

本論文透過研究安部公房發表於 1950 年代中後期的作品，分析文本中所表現出的衝突意識，研究安部與日本共產黨之間矛盾的源泉。50 年代初期，安部公房的小說中關於美國的描寫隨處可見，但隨著蘇聯的國際地位不斷上升，特別是安部本人在 1956 年親身遊歷東歐後，其小說中關於蘇聯的描寫所佔比例越來越大。

安部遊歷東歐後不久，在波蘭以及匈牙利發生了政治衝突事件，此時已經回到日本的安部受上述事件影響，他將關於東歐經歷的諸多散文修改後編成文集，即《東歐行》。透過本書的描寫可以發現安部非常欣賞帶有沙文主義的民族主義，並高度讚揚了發生在東歐的一系列衝突事件。安部在書中強調了蘇聯政治壓迫的重要性，對於群衆與蘇聯的對抗評價甚高。筆者認爲這些言論的出發點皆在於安部內心的衝突意識。由於日本共產黨並不贊同用暴力解決問題，因此安部與日本共產黨之閒產生了不可彌補的間隙。

安部與日本共產黨的間隙不僅體現在散文中，發表於東歐遊歷中的《耳朵的價值》，以及東歐遊歷後發表的《鏡子與哨子》等小說的字裏行間中，亦可發現由於安部的衝突意識導致而成的與日本共產黨之間的矛盾。本論文透過分析安部作品中所表現出的衝突意識，希望可以能為關於安部與日本共產黨間的矛盾研究指出一個新方向。

關鍵詞：安部公房、東歐經歷、日本共產黨、政治壓迫

受理日期:2018.03.10

通過日期:2018.05.11

Kōbō Abe's skepticism in the 1950s: The Representation of Experience in Eastern Europe

Xie, Fang

Doctoral Program, Tokyo University of Foreign Studies, Japan

Abstract

This study focuses on the works written by Kōbō Abe in the late 1950s, and clarifies the representation of his skepticism of Japanese Communist Party through the text analysis. As the Soviet Union expands its influence on the world in the late 1950s, Abe became to write about the Soviet Union in his works, especially after the trip to Eastern Europe in 1956.

Abe wrote many essays based on his real experience in Eastern Europe. These essays suggest the skepticism of Abe to the Japanese Communist Party. After Abe returned to Japan, the political revolution has occurred in Poland and Hungary. Abe was inspired by these political events, and revised the essays which wrote about the experience in Eastern Europe, and published as a book "Going to Eastern Europe". In this book, Abe emphasized the necessity of political Repression of the Soviet Union, and he wrote the importance of energy, brought by the conflict with the people's resistance. In contrast the Japanese Communist Party denied the function of conflict, this means there was a confrontation between Abe and the Japanese Communist Party. This study confirms the confrontation between Abe and the Japanese Communist Party, and clarifies the social situation of Japan in the 1950s.

Keywords: Kōbō Abe, Experience in Eastern Europe,
Japanese Communist Party, Repression

安部公房における懐疑的な 1950 年代
―東欧体験の表象をめぐって―

解放
東京外国語大学博士後期課程

要旨

本稿は、安部公房が 50 年代後半に刊行した諸作品に焦点を当て、安部の日本共産党に対する懐疑と、彼が抱き続けてきた対立意識がテクストで如何に表象されてきたかを明らかにする。安部は 50 年代初期までアメリカを意識しながら創作してきたが、56 年の東欧体験を経て、作品ではソ連を表象するようになったのである。

東欧での実体験を基に、安部はエッセイ集『東欧を行く』を出版した。本作において、安部は東欧で発生した一連の政治事件を高く評価している。安部はソ連の政治的抑圧の必要性を強調し、ソ連の抑圧と民衆の反抗との衝突によって生まれるエネルギーを期待している。しかし、日本共産党は矛盾の機能を否定し、そこから安部と日本共産党との確執が発生するようになった。

こうした対立意識と深く関わる安部と日本共産党との確執は、東欧滞在中に掲載された「耳の価値」と、東欧外遊後に書かれた「鏡と呼子」などの小説においても伺うことができる。本稿は、安部と日本共産党との確執の原因を究明することによって、安部が「抑圧」を余儀なくされた世界における今後の小説形式の展開にとって、未だに重要な意義を持ちうる作家であることを実証する点に意義が見られる。

キーワード：安部公房、東欧体験、日本共産党、抑圧

安部公房における懐疑的な 1950 年代
―東欧体験の表象をめぐって―

解放
東京外国語大学博士後期課程

1. はじめに

安部公房（1924～1993）は、1951 年に日本共産党に入党したが、十年後の 1962 年 2 月に日本共産党から除名されたのである[1]。共産党からの除名は、安部公房研究の重要な一環をなしているが、除名に関する研究が盛んに行われたのは 90 年代以降のことである。例えば、小林治は安部が日本共産党に抗争声明を出したのは、日本共産党における民衆主義の欠如と、党の指導部における文学活動への介入が原因であると指摘している[2]。安部の日本共産党の除名について、歴史的文脈に沿って詳しく論じたのは、米岡幹夫である。

> 党側の運営は飽く迄運営機関の存続を重視した皮相的組織に過ぎず、基礎的深層部分で、「大衆」主体が根付いていた東欧諸国と性格や様相が明らかに異なっており、作為的に「人民」や「民衆」の理念を用いながら自らの統治機構や運営手法を正当化並びに強化させるドラマツルギーの機関に過ぎぬ点を彼は見出したと言える。よって公房は自らの観念的理論と経験事象が東欧という共産圏において象徴的関連づけを果たし得た点を重視し、自己思想（イデオロギー）の生正当性を公的に発

[1] 安部公房の共産党に入党する時間には諸説ある。谷真介の『安部公房評伝年譜』（新泉社、2002）によれば、安部が共産党に入党したのは 51 年の 6 月である。瀬木慎一の『日本の前衛 1945-1999』（生活の友社、2000）によれば、安部の共産党入党時間は 51 年 3 月である。安部公房自筆年譜では入党に関する記述がないため、本稿では安部公房の共産党入党を 51 年とする。

[2] 小林治（1997）「『砂の女』の位相（一）―転換期の安部公房―」『駒澤短大国文』第二十七号、p36

見すると同時に党を攻撃し始めたことが推察される。[3]

米岡の結論は、安部が東欧での実体験を通して彼の「観念的理論」の正確性を確認したことによって、日本共産党を懐疑するように至った過程を指摘している点に意義が見られる。米岡の考察以降、安部における日本共産党との確執は、日本共産党の綱領が 1950 年代において大きく変化したため、安部の内面で抱く共産主義が、現実の共産主義との概念のギャップが徐々に拡大されるところに始まる、という結論が通説となった。そのギャップをめぐって、米岡は安部の東欧外遊との関連性から詳細に論じた。しかし、氏の論文では、安部の東欧体験の重要性が詳しく論じられているが、安部の「観念的理論」＝自己思想について十分に検討されたとは言い難い。

本稿では、安部公房の日本共産党との確執を論じた諸先行研究を踏まえた上で、安部の 50 年代後半に刊行された諸作品を通して、テクストにおけるアメリカの表象が徐々に抑制され、同時にソ連の表象が見られることに焦点を当て、安部が内面で抱き続けてきた対立意識が如何に機能することによって、日本共産党に対して懐疑的になってきたかを明らかにしたい。

2.　アメリカの表象からソ連の表象への転換

安部が文壇での地位を築き始めたのは、恐らく、1951 年 2 月号の『近代文学』に掲載された「S・カルマ氏の犯罪」が第 25 回芥川賞を受賞したことが大きな契機と言えるだろう[4]。安部がこうしたシュールレアリスム的な作品を書き始めたのは、昔から愛読しているカフカの影響であることは言うまでもない。しかし、注目に値するこ

---

[3]　米岡幹夫（2003）「安部公房の政治的理念に関する論攷―『東欧を行く―ハンガリア問題の背景』から―」『社会文学』第十八号、p50

[4]　「S・カルマ氏の犯罪」は 1951 年 2 月号の『近代文学』で初めて掲載され、1951 年 5 月に月曜書房から刊行された単行本『壁』に収録されている。本作は、第二十五回芥川賞（1951）を受賞し、その選評では、賛否両論の結果になったが、選考委員の舟橋聖一が「新しい小説の典型」と高く評価するように、安部が前衛作家としての地位を築いたことは確かである。(「第二十五回芥川賞選評」『芥川賞全集・第四巻』文芸春秋社、1982、p444)

とは、前衛的作品を書く前に、安部は実存主義に傾倒しているため、リルケを模倣した一連の哲学小説を創作している点である。その代表作が 1948 年 10 月に刊行された『終りし道の標べに』である。本作に関して、安部は次のように述べている。

> 二十三歳で書いた処女作『終りし道の標べに』は、「小説を書いたつもりじゃなかった。哲学論文みたいなもので、いる場所がないから帰るんだが、帰る行為だけあって帰りつく場所がないことを書いたんだと思う。」[5]（下線筆者、以下同じ）

引用に示されるように、『終りし道の標べに』に関して、安部は小説として書くより、「哲学論文」として書いているのである。哲学的論述が大きな割合を占め、物語性に乏しいことは、安部の 1940 年代の諸作品に共通する特徴と言える。こうした作品に通底するのは、安部が傾倒している実存主義と思われる。しかし、50 年代に入ってから、安部は実存主義及び個人の存在への問いから解放され、作品ではシュールレアリスムを主に反映するように変容した。こうした転換について、安部自身は次のように語っている。

> 戦争中、ぼくは実存主義者だったんだよ。それで『終りし道の標べに』を書いたんだね。「存在は本質に先行する」という思想さ、しかしこのテーゼはすこぶる自己否定的だね。しがみつこうとすればするほど、はねかえされる。[…]そこらへんからだんだんと唯物論に近づいていった。その手掛りになったのがシュール・リアリズムなんだ。転換期だったな。[…]あのころやっていたのは、いかにさまざまな現象からヴェールをはぎとるかということ。観念的といわれたが、どう観念と闘って観念のヴェールをはぐかという、自分の中へ唯物論を確立するス

[5] 安部公房（2009）「〈新人国記’82 外地㉜―現代の先端を行く〉朝日新聞・夕刊」『安部公房全集 30』新潮社、p676

トラッグルだったと思うんだ。そして行きついたのが『壁』だった。「S・カルマ氏の犯罪」というやつ。[6]

リルケを模倣して書き始めた『終りし道の標べに』から、カフカを意識して創作した「S・カルマ氏の犯罪」まで、安部は意図的に作品の文体を変えたのが分かる。安部の話によれば、実存主義からシュールレアリスムへの転換は、観念からの離脱と唯物論への接近を意味するのである。換言すれば、安部のシュールレアリスムを表象する変形物語は、精神や意識などの投影を抑えて、現実社会の諸問題を反映する作品と言えるだろう。実際、安部が 50 年代初期に創作した一連の変形物語は、戦後日本に加担している社会的・政治的抑圧を表象することが多い。例えば、「S・カルマ氏の犯罪」と共に『壁』に収録されている「洪水」[7]が代表作と思われる。

事実世界のいたるところで、労働者や貧しいものたちの液化が始まっていた。特にいちじるしいのは集団的な液化であった。大きな工場で機械の運転が不意に停止し、労働者たちがいっせいに液化して、ひとかたまりの液体になり、小川になって戸の隙間から流れ出したり、壁を逼い上って窓から流れ出したりした。[…]その他、刑務所の囚人たちの集団化による逃亡事件や、一村の農民全部の液化による小洪水などが、相ついで新聞紙上につたえられた。[8]

引用に書かれているように、液体化する人間は「労働者や貧しいもの」と、「囚人」や「農民」である。つまり、本作で変形が起きている共同体は全て社会的弱者であり、政治的抑圧を受けている共同

---

[6] 安部公房(1997)「解体と総合」『安部公房全集 5』新潮社、pp440-442.

[7] 「洪水」は 1950 年 12 月号の『人間』に収録されている「三つの寓話」の一つである。「洪水」の他に、「三つの寓話」に収められている小説は「赤い繭」と「魔法のチョーク」がある。三篇とも、1951 年 5 月に月曜書房から刊行された単行本『壁』に収録されている。

[8] 安部公房(1997)「洪水」『安部公房全集 2』新潮社、pp495-496.

体と言える。その反面、液体化する人間を抑圧する存在は、「ついに国王や元首たちも、事態の急迫を認めた。人類をこの洪水による滅亡から救うために、あらゆる精神と物質とを動員し、大堤防の構築を急がねばならぬと声明を発した」[9]に示される通り、「国王や元首」が象徴する国家的機関である[10]。従って、50 年 12 月の「洪水」において、変形は国家的抑圧と関係していると言えるだろう。

「洪水」で描かれている国家による政治的抑圧は、次の変形物語「R62 号の発明」では、その抑圧がアメリカに由来すると明確に表象されるようになった。本作は 53 年 3 月号の『文学界』に掲載された安部の短編小説であり、失業で自殺する男がロボットに改造される話が主に書かれている。次の描写は看過できない。

> 機械の設計をしていたのですが、アメリカの技術出資がきまり、仕事がなくなりましてね。死んだって解決にならないくらい、分ってるが、ぼくみたいに専門化しちゃうと、まるで弱虫になるんだな。死ぬつらさより、生きるつらさのほうが、大きいのです。[11]

「R62 号」が自殺する理由は、「アメリカの技術出資がきまり、仕事がなくなりましてね」である。つまり、「R62 号」を変形させた直接原因は、アメリカの技術進出によっての失業である。従って、「R62 号の発明」で前景化されている社会的・政治的抑圧はアメリカに由来していると断言できる。50 年代初期の変形物語においてアメリカによる政治的抑圧が表象されるのは、日本の社会状況に対する安部の関心と緊密に関わっている。周知の通り、サンフランシスコ平和

---

[9] 前掲書、p497

[10] 「洪水」に関する先行研究の中で、液体化する人間をプロレタリア階級として、液体化しない人間をブルジョア階級とする論考が多い。例えば、田中裕之の「比喩と変形--安部公房の変形譚について」(『梅花女子大学文学部紀要』第 37 号、2003) が代表的である。しかし、玉川晶子は「安部公房『壁』について--第三部「赤い繭」論」(『言文』第 50 号、2003) の中で、溺死した人間は社会的強者であるという異なる結論を示している。

[11] 安部公房(1997)「R62 号の発明」『安部公房全集 3』新潮社、p411.

条約が 52 年 4 月 28 日に発効するまで、日本は連合軍総司令部（以下 GHQ）に支配統治されていた[12]。しかし、条約発効後、日米安全保障条約が締結され、事実上、日本は依然とアメリカに支配されていると言っても過言ではない[13]。従って、この時期の変形物語で、アメリカの政治的抑圧が表象されるのは、サンフランシスコ平和条約発効後においても、日本がアメリカに支配統治されている現実状況を反映していると言えるだろう。

注目に値するのは、「R62 号の発明」以降の変形物語では、アメリカによる政治的抑圧の表象が徐々に見られなくなる点である。例えば、1954 年 4 月に刊行された変形物語「変形の記録」が代表的である。「変形の記録」は、兵士の「ぼく」が味方の少尉に殺されて魂となり、魂となった「ぼく」が少尉と共に旅をする話を描いている。本作の冒頭では、「八月十四日、ぼくはコレラにかかり、部隊はぼくを馬小舎に閉じこめて出発してしまった」[14]と書かれている。また、テクストの中盤では、「草原がさけ、すぐ正面に、中国人の小さな部落の門が、防空用ヘッドライトの赤い光に照らしだされていた」[15]という描写が見られる。こうした描写は、終戦間際の満洲国のイメージを浮き彫りにし、終戦間際の満洲国で実際に起こった日本軍とソ連軍との戦いを示唆していると言えるだろう。とりわけ、テクストに表記されている「赤軍」という名称は、ソ連軍を指し示す重要な裏付けと思われる。但し、「ぼく」を銃殺したのは敵であるソ連軍ではなく、同じ日本軍ということは看過できない。つまり、「ぼく」が魂に変形するのは、同じ共同体内部に属する日本軍人の暴力行為によってなされるのである。これは前文で論じた変形がアメリカの政治的抑圧と因果関係を持つ変形物語とは異なる。

---

[12] 「日本国との平和条約」、本条約はアメリカのサンフランシスコで署名されたため、サンフランシスコ講和条約、サンフランシスコ条約などとも言われている。本稿では、外務省の日本外交文書で使われている言葉、「サンフランシスコ平和条約」を使用する。

[13] 『日本外交文章--サンフランシスコ平和条約--調印・発行』(外務省、2009)を参照した。

[14] 安部公房（1997)「変形の記録」『安部公房全集 4』新潮社、p262

[15] 前掲書、p272

変形物語だけではなく、同時期の他のジャンルの小説作品にもソ連の面影が見られる。例えば、54年2月号の『文芸』に掲載された「パニック」から、安部のソ連に対する関心が伺える。

> 「仕事って、いったいどんなことなんです？」
> 「一と口にいって、まあ、ドロボウ会社だな」
> 「いやですよ！」と私は反射的に立ち上っていた。「おかしいと思っていたんだ。おことわりですよ、そんなこと！」もらった金をたたき返して、私は外に飛びだした。K が追いかけてきて言った。「後悔するよ。社員でなくなれば、君は、8時間以内に間違いなくつかまっちゃうんだ。殺人犯だぞ。ね、君は首絞刑だぞ」[16]

「パニック」では、泥棒会社が多様な方法を使って、キャラクターの「私」を会社に入社させる話が描かれている。注意すべきことは、会社は入社を拒んでいる「私」を脅かすことまでして、「私」を会社の共同体に取り組もうとしている点である。安部のこれまでの作品では、個人が共同体から排除されることが多く書かれている。例えば、「S・カルマ氏の犯罪」では、名前を剥奪される「カルマ氏」は社会に排除される存在として描かれている。しかし、「パニック」では、排除とは逆に、個人が共同体に吸収されることが描かれている。こうした個人を強制的に共同体に吸収するプロセスは、ソ連が衛星国を政治的に抑圧しながら統治下に収める政策を連想させる。「パニック」の他に、「独裁者」という作品からもソ連を意識している安部の姿勢が伺える。55年8月号の『日本読書新聞』にコントとして掲載されている「独裁者」は、恐らくスターリンをアイロニカルに語っていると思われる。

---

[16] 安部公房（1997）「パニック」『安部公房全集 4』新潮社、p81

それというのも、この国を治めているのが一人の独裁者だったからである。[…]なにもすることがなくなり、退屈のあまり、ただ徒らに悶々の日を送っていた。しかし彼の支配原理が「秩序にはじまり、秩序におわる」という以上、退屈はむしろ理想的コンディションだったと言わなければなるまい。[17]

本作が掲載された時間と、本作のタイトルを併せて考慮すれば、当時の読者の内面で浮彫にされた独裁者のイメージは、ソ連のかつての独裁者、スターリンを指し示していると言えるだろう。上記の引用も、恐らく、スターリンの独裁統治を揶揄していると思われる。つまり、安部公房の 1950 年代の作品には、哲学小説から変形物語への転換の他に、53 年 3 月の「R62 号の発明」以降、もう一つの転換が見られる。その転換の印が、作品ではソ連の痕跡が示唆的に描かれるようになった点と言えるだろう。

3. 東欧体験による対立意識の喚起―『東欧を行く』

安部の変形物語はアメリカの政治的抑圧を表象してきたが、次第にソ連を示唆的に表象するように転換を示す。そうした転換が現れる原因の一つとして、50 年代におけるソ連の一連の政治事件が世界的な波紋を及ぼしていることが考えられる。例えば、53 年 3 月 5 日のスターリンの死去、56 年 2 月 24 日のスターリン批判で有名なソ連共産党第 20 回大会、56 年 6 月 28 日のポーランド・ポズナニ事件、56 年 10 月のハンガリー事件などが挙げられる。51 年に日本共産党に入党した安部が、こうしたソ連の動向に無関心なわけがない[18]。安部の作品がソ連への興味を示すもう一つの原因が、動乱が世界に波紋を及ぼしている中で、安部がソ連の衛星国を旅行していたことである。東欧社会主義圏での体験と、その体験によって日本共産党

---

[17] 安部公房（1997）「独裁者」『安部公房全集 5』新潮社、p196

[18] 座談会「ハンガリー問題と文学者」（1956 年 11 月）、座談会「動乱と知識人」（1957 年 1 月）などがソ連の一連の変革に対する安部の対応と言える。

に対する安部の言説を完結本として出版されたのが 57 年 2 月の『東欧を行く―ハンガリア問題の背景』(以下『東欧を行く』) である[19]。本節では、『東欧を行く』を対象に、安部が如何に日本共産党に対して懐疑的になったかを明らかにする。

1956 年 4 月、「新日本文学会」にチェコから作家大会（4 月 22 日～29 日）の招待状が届き、中野重治からなる常任幹事会は安部公房を派遣することに決めた。安部の自筆年譜では、「チェコスロヴァキア作家大会の招待で、新日本文学会を代表して、東欧旅行。」[20]と記されている。谷真介の『安部公房評伝年譜』によれば、安部の東欧旅行の詳細は以下の通りである。

> 二十三日、「新日本文学会」および国民文化会議の代表として、プラハに向け羽田を発つ。ローマ、パリを経て二十八日プラハ着。翌日大会終了。三十日、プラティスヴァの宮殿見学、ドナ川下り。五月二日、プラティスヴァからバレンチーヌを経てバーク川を北上、サドリバ着。民族舞踊を見学。四日、レボチャ市着。ヤコブ教会見学。ジプシー村訪問。［…］六月十二日からルーマニア、コンスタツァ、東ドイツ、パリを経て六月二十四日帰国。[21]

引用に示されるように、安部は当時のソ連の衛星国を二ヶ月体験していた。この体験談を記した一連の文章を収録したのが『東欧を行く』である。『東欧を行く』をいち早く評価した小田切秀雄は「かれの東欧旅行記は、その後の事件によつて滑稽ないし気の毒なものとなる代りに、事件後に一層読まれていいものになつたのである。

---

[19] 『東欧を行く―ハンガリア問題の背景』は、安部の各雑誌で発表された東欧外遊に関するエッセイを集めてまとめたエッセイ集である。書き下ろしの部分を含めて一冊の本として 1957 年 2 月に大日本雄弁会講談社から刊行された。各章と初出との対応関係は新潮社の『安部公房全集』第 7 巻の「作品ノートに」に書かれている。

[20] 安部公房（1998)「年譜『新鋭文学叢書』に寄せて」『安部公房全集 12』新潮社、p466

[21] 谷真介（2002)『安部公房評伝年譜』新泉社、p52

政治によつてくらまされぬ眼をもつたコンミュニスト作家であつたことがこのような旅行記を可能にした」[22]と、本作を高く評価している。ただし、小田切が後程の論評において、「六全協後のダルな空気のなかでは、こういうことばをふくむ安部の論の全体を公然と支持する者も非難する者も少なかった」[23]と述べているように、『東欧を行く』の同時代評を挙げることは困難である。その理由について、呉美姃は「当時の日本文学界の混乱は、安部公房という作家だけに該当するものではなく、戦後十年を迎えた日本文学界全体が抱えていた問題が表面化したと理解しなければならないであろう」[24]と解釈している。つまり、『東欧を行く』で前景化されている問題は、安部だけが直面している問題ではなく、当時の日本文学界が直面している問題でもあるため、歴史的文脈と緊密に絡んでいる本作への同時代の評価が難しいのである。その問題とは、恐らく 1950 年代における日本共産党の分裂を指し示す。

1950 年 1 月、スターリンは、コミンフォルムの機関誌『恒久平和と人民民主主義のために』で「日本の情勢について」という文章において、日本におけるアメリカの全面的支配統治を論じ、日本共産党の妥協性を国際的に批判している。日本共産党は同月に「「日本の情勢について」に関する所感」を発表し、自己の闘争性を主張して反論した。しかし、日本共産党党内では、ソ連の批判を容認する「国際派」と、批判に反論する「所感派」に分裂した。「所感派」が起草した「日本共産党の当面の要求―新しい綱領」は日本共産党第 5 回全国協議会（五全協、1951 年）で提案され、党は軍事方針を採るようになる。軍事方針は武装闘争を行ったため、日本共産党は次第に世論の支持を失い、第 6 回全国協議会（六全協、1955 年）で、武装闘争を「極左冒険主義」として自己批判した。六全協後、「所感派」は勢力を失い、「国際派」が権力を握るようになり、日本共産党は再

---

[22] 小田切秀雄（1957）「書評安部公房著　東欧を行く」『群像』講談社、p231
[23] 小田切秀雄（1988）『私の見た昭和の思想と文学の五十年　下』集英社、p173
[24] 呉美姃（2009）「東欧から見た日本―『東欧を行く』論」『安部公房の〈戦後〉―植民地経験と初期テクストをめぐって』クレイン社、pp157-158

び統一した[25]。安部は、「所感派」の勢力下にある『人民文学』に参加したため、55年に政権を握っている「国際派」から構成されている日本共産党指導部との間に徐々に確執が生じるようになった。

安部はこのような状況下で東欧に渡り、その見聞を文章に記している。『東欧を行く』に収録された文章の中でもとりわけ注目されてきたのが、「東ヨーロッパで考えたこと」と「日本共産党は世界の孤児だ―続・東ヨーロッパで考えたこと」[26]である。東欧体験を通して、安部の思想を顕著に表したのが次の引用と思われる。

> 私が問題にしたいのは、このジプシーに対するこだわりといい、あるいはドイツ人に対する偏見といい、意外なほどの民族主義についてである［…］国境のある人々は、国境によって自己を限定する。彼らは自分を強く意識し、国境コンプレックスによって民族主義におちいりもするが、同時に苦しみも味うのだ。国境にとらわれながら、とらわれることによって逆に脱出をこころみる。彼らの中の先進的思想がインターナショナルな立場に向ったのも当然だといわなければなるまい。だから彼らのインターナショナリズムは根強くまた自覚的なのだ。それにひきくらべて日本の場合は国境に対決した経験が弱い。苦しみがないから根は排外主義的でなくても、排外主義に対する抵抗力もまた弱いのだ。しかし戦後はアメリカの干渉によって、国内に外国がつくられ、民衆が国境を意識しはじめている。基地の鉄条網から、日本にも本物のインターナショナリズムが育ちはじめるのかもしれないのだ。[27]

安部は偏見性を持つ民族主義の源泉を国境との関わりの中から探

---

[25] 神山茂夫編（1971）『日本共産党戦後重要資料集第一巻』三一書房

[26] 「東ヨーロッパで考えたこと」は1956年9月の『知性』に掲載され、『東欧を行く』の第Ⅰ部の前半部分として収録され、「日本共産党は世界の孤児だ―続・東ヨーロッパで考えたこと」は10月の『知性』に掲載され、『東欧を行く』の第Ⅰ部の後半部分として収録されている。

[27] 安部公房（1956）「東ヨーロッパで考えたこと」『知性』第3巻10号、p68

り出そうとして、チェコ人の排外的な民族主義を「国境病」と名付けている。この記述に対して、「安部がここでいう「国境」とは、チェコスロヴァキアという政治上の国家（ステイト）よりも、チェコ人、スロヴァキア人、あるいはジプシーという民族集団（ナショナリティ）に関するものなのである。[…]安部のいう「国境病」とは、政治上の国境を支持する国家（ステイト）に対し、民族集団（ナショナリティ）による「国境」を擁護する姿勢のことである」[28]という鳥羽耕史の分析は鋭い。

注目に値するのは、こうした偏見性を持つ民族主義に対して、安部は肯定的に記述している点である。通常であれば、安部が述べているような民族主義は平等を唱えるナショナリズムからは批判されるべきものだが、鳥羽も指摘しているように、安部はこの民族主義をネガティブに描写しているのではなく、逆にこの排外性を持つ民族主義の中からポジティブなものを探し出そうとしているのである。

坂堅太は偏見性を持つ民族主義に対する安部の関心を、「安部が関心を抱いたのは、この〈境界〉に対する意識の強さであり、「国境」というものが果たす機能である。国境により自己を限定するというのは、同時にその境界線の外にいる他者の存在を強く意識することでもある。彼らは国境を挟んで対峙する他民族との対立・衝突の中で、自らの民族意識、アイデンティティを作り上げていく。彼らにとって、ナショナリズムとは常に具体的な民族的他者との関係の中で定立されるものとして捉えられている。」[29]と解釈している。

筆者も鳥羽と坂の論には同意するが、安部の語る排外的民族主義そのものには反対する。但し、ここで焦点を当てるのは、こうした偏見性を持つ民族主義を安部が積極的に評価することは、当時実権を握っている日本共産党の「国際派」における気弱な政策に対する安部の懐疑を意味する点である。例えば、「日本共産党は世界の孤児

---

[28] 鳥羽耕史（2007）「国境をめぐる思考―『東欧を行く』1956」『運動体・安部公房』一葉社、pp214-215

[29] 坂堅太（2016）「安部公房と「一九五六・東欧」」『安部公房と「日本」―植民地/占領経験とナショナリズム』和泉選書、pp214-215

だ―続・東ヨーロッパで考えたこと」において、安部は次のように述べている。

> 資本主義社会の矛盾が発展を引きとめるマイナスの矛盾なら、ここには発展を促進させるプラスの矛盾がなければならないはずである。[…]もし大衆に真の社会主義を知らそうと思うなら、社会主義を天国のように描いてみせることではなく[…]ここ資本主義国にはマイナスの矛盾が満ちあふれているが、べつな社会ではプラスの矛盾が支配的になるのだということを示すことによって、その閉ざされた意識を開放することが必要だったのである。しかしこれまでの社会主義国からの宣伝、またはそれを受けて立つわがコミュニストたちの態度は、かならずしもその必要を満たすものではなかった。[30]

安部は東欧体験を経て、東欧社会がすべて予め設定された設計図に従って建設されていることを実感し、社会から全く矛盾が感じられないことを記述している。安部の話によれば、「マイナスの矛盾」とは発展を引きとめるものだが、「プラスの矛盾」は発展を促進させるものである。しかし、「これまでの社会主義国」にはこうした「プラスの矛盾」が見られず、「わがコミュニストたち」もこの「プラスの矛盾」を無視している。恐らく引用で語られている「わがコミュニストたち」は、当時の日本共産党指導部を構成する「国際派」を暗に指し示している。つまり、矛盾の重要性を語る安部の言葉は、「国際派」におけるソ連の批判に対して妥協する政策への懐疑を示唆し、その懐疑とは、安部が矛盾のない東欧の社会状況を実際に見ることによって、「国際派」が掲げている反抗精神のない政策が導く日本社会の今後の可能性への懸念を意味すると言えるだろう。

筆者は、安部の内面で抱き続けている対立意識こそが、偏見性の

---

[30] 安部公房（1956）「日本共産党は世界の孤児だ―続・東ヨーロッパで考えたこと」『知性』第 3 巻 10 号、p49

ある民族主義に対する肯定的態度と、日本共産党への懐疑に通底しているものだと考えている。筆者は既に出版した論文「安部公房初期作品研究―「抑圧の物語」をめぐって」[31]において、安部の初期文学には、政治的抑圧に対抗する特質がある、との考えを示した。上記の論文において筆者は、フロイトの精神分析を援用して、GHQの検閲という政治的抑圧と、極度の貧困の中で生きて行く生の欲動＝創作することが衝突することによって、安部公房の文学創作におけるエネルギーが生産されることを明らかにした。つまり、創作すること＝自己保存欲動という被抑圧階級が、GHQ の検閲や自己検閲が象徴する抑圧階級と衝突することによって生まれる文学創作のエネルギーを追求するためには、安部は常に二項対立的な思想を内面で意識することを余儀なくされたのである[32]。

考察を『東欧を行く』に戻る。坂の分析によれば、安部が排外的民族主義に関心を寄せるのは「彼らは国境を挟んで対峙する他民族との対立・衝突の中で、自らの民族意識、アイデンティティを作り上げていく」のである。既に述べたが、安部が日本共産党に対して懐疑的になったのは､共産党が矛盾を十分に利用しないからである。つまり、安部が偏見性を持つ民族主義を肯定することと、日本共産党に対して懐疑的になったことは、両者が共に対立によって生まれるエネルギーを利用するという安部の対立意識を反している点で、同じであると言えよう。例えば、次の引用がその傍証と思われる。

> 今度の旅行で私がなによりも期待していたものは、まさにその新しい社会主義的矛盾の発見にほかならなかったわけであ

---

[31] 解放（2018)「安部公房初期作品研究―「抑圧の物語」をめぐって」『言語・地域文化研究』第 24 号

[32] フロイトの昇華理論によれば、人間が文化の仕事におけるネルギーを獲得するためには、超自我がもたらす抑圧と、人間の欲動の満足が葛藤しなければならいのである。政治的抑圧と個人の欲動との衝突はエネルギーを生産し、そうしたエネルギーが芸術創作に発散すれば、芸術に貢献できる。(「〈文化的〉性道徳と現代の神経質症」（道籏泰三訳『フロイト全集 9』岩波書店、2007)。安部は「シュールリアリズム批評」(『みづゑ』美術出版社、1948）の中で、フロイトの昇華理論の実用性を論じている。

る。［…］私は直接矛盾をとらえるよりもむしろその存在をつかむための契機として、これまでその矛盾を覆いかくしプラスのエネルギーに組織しえなかった弱点の部分に注目するつもりでいた。[33]

引用に示されるように、安部は矛盾そのものを求めるのではなく、矛盾を通して生産されるエネルギーを期待していることが分かる。従って、プラスの矛盾を無視する日本共産党の「国際派」に対する安部の懐疑は、彼らが矛盾という対立によって生まれるエネルギーを看過しているところに由来すると断定できる。更に、先行研究が既に論じたように、排外的民族主義は、国境によって自己を強く認識する同時に、国境の外側にいる他者と対立で生まれるコンプレックスによって確立されるのである。つまり、安部が排外的民族主義に関心を寄せた原因の一つが、こうした排外的民族主義は対立構造を重視しているからである。従って、安部が日本共産党に対して懐疑的になった原因と、安部が偏見性を持つ民族主義をポジティブに評価する理由は、共に対立によるエネルギーを期待する安部の対立意識と相反している点から説明できる。こうした経緯を明らかにすれば、東欧での動乱に対する安部の記述も理解できる。例えば、ポズナニ事件[34]について、安部は次のように述べている。

だから私はあれを反共暴動だとは思わない。それはむしろはげしい前進にともなう震動のようなものだったのだろう。［…］私はやはりこの暴動をもふくめた全部を前進なのだと考えたい。それをマイナスの作用だと考えずにプラスのエネルギーに

[33] 安部公房（1998）「東欧を行く」『安部公房全集 7』新潮社、p44

[34] ポーランドでは、ソ連共産党第 20 回大会中に、1938 年のポーランド共産党解体が根拠のない不当なものであったことが発表され、6 月のポズナニの大デモで多くの死傷者が発生した。（木村英亮『ソ連の歴史―ロシア革命からペレストロイカまで』山川出版社、1991）この事件に関しては、多様な名称がある。本稿では、ポズナニ事件とする。

転化することができてこそ真の共産主義といえるのだ。[35]

安部はポーランドで勃興したポズナニ事件を反共産党の行動ではないと主張している。彼が信じている共産主義とは、プラスの矛盾によって生産されるエネルギーを重視すべきものであるため、ソ連の政治的抑圧に対抗するポーランドの民衆は、プラスの矛盾を作り出していることで、共産主義には反していないと安部は考えている。しかし、安部の認識は当時の日本共産党から即座に批判された[36]。その批判に対して、安部は次のように返答している。

> それがプラスの矛盾、大衆のエネルギーの一つの表現であったことを、認めたわけである。[…]私の判断が、決してデマ流しでなかったことを、事実が証明してくれたのである。もし、大衆のもつ複雑な、そして目がくらむばかりのエネルギーに率直であり、それを信じきる勇気と、同時にそれに方向をあたえる組織力がありさえすれば、アカハタの批判者のような言葉は、出そうにも出せなかったはずのものなのである。[37]

安部は返答文章において、「プラスの矛盾」を「大衆のエネルギー」と同一レベルで語っている。つまり、東欧体験は、安部が過去に抱いている矛盾＝対立することによってエネルギーが生産される対立意識を喚起したのである。実はエッセイだけではなく、小説作品においても、東欧体験によって喚起された安部の対立認識が伺える。次節では、東欧外遊前後に創作した小説「耳の価値」と「鏡と呼子」から東欧体験の表象と安部の思想を明らかにしたい。

---

[35] 前掲 33、p34

[36] 共産党員の竹本賢三は 1956 年 9 月 20 日の『アカハタ』で、「資本主義社会での矛盾について　安部公房氏に（下）」という文章において、安部の旅行記について「安部氏の旅行記全体が日本に、日本共産党に向けられたものであった。主観的には、反省を促す警告として向けられたものであった。けれども結果としては、日本の党だけではなく、東欧の人民民主主義諸国ぜんたいへも泥をひっかけたことになったのである。」と批判している。

[37] 前掲 33、p103

4.　反転するテクストと日本共産党の対ソ連政策―「耳の価値」

「耳の価値」は 1956 年 5 月号の『知性』に掲載された安部の短編小説である[38]。この小説は、大学生の目木が理由もわからず留置場に入れられるところから始まる。無罪釈放となった目木は学校に戻るが、学費滞納で除籍寸前になっているところ、耳の大きい同級生の横山と知ることになる。目木は横山の耳を利用して、交通傷害保険自動販売機で保険金を取ろうとした。しかし、二人はあらゆる方法を使っても、横山の耳に傷一つ付けることができなかった。最終的に、二人は犯行しているところを巡査に捕まえられて、目木だけが再び留置場に入れられてしまった。

本作の刊行時間は注目に値する。本作が初めて掲載されたのは 56 年 5 月で、この日付では、安部はちょうどチェコを見学している最中であり、彼の東欧でのスケジュールからしても、創作に使える時間はなかったはずである。従って、安部はチェコ（56 年 4 月 24 日）に着く前に原稿を仕上げて、意図的に 5 月号の『知性』に発表する可能性が一番高い。傍証として、「耳の価値」に描かれている耳を使って保険金を騙し取るプロットは、1956 年 1 月号の『文芸』に掲載された安部の短編小説「手段」に既に見られることが挙げられる。「手段」と「耳の価値」を比較すれば、その共通性が明らかになる。

> 「耳を落してみますよ」
>
> 「耳？いや、耳はむずかしい。なかなかあんた、思ったように行くもんじゃないよ。急激かつ偶然なる外来事故で、耳を落すなんて、いったいどういう場合があると思うね？まず、工事場の下を通っている場合、窓ガラスに首をつっこんだ場合、倒れたところを踏んづけられた場合……」[39]（「手段」）

---

[38]　「耳の価値」は 1974 年に「耳の値段」と改題されて新潮文庫の『R62 号の発明・鉛の卵』に収録さているが、引用は『安部公房全集 6』（新潮社、1998）に収録されている初出版のテクスト「耳の価値」による。

[39]　安部公房（1997）「手段」『安部公房全集 5』新潮社、pp384-385

「なんだって、かまいやしない。さあ、このおれの耳は君のものだ。自由にしてくれ、君のすきにしてくれ」[…]
「二つとも、なくしちゃってかまわないのかい？」
「いいさ、こんな耳」[40]（「耳の価値」）

56年1月の「手段」は、耳を破損することで保証金を取ろうとする点において、56年5月の「耳の価値」と共通している。安部が1月に日本で構想した物語を、東欧外遊の期間中に改めて刊行する行為は、恐らく、本作では日本と東欧諸国との関係性が示唆されていることを意味する。

まず、キャラクターの象徴性について考察したい。主人公の目木に関して、「目」の横棒を一つ取って、「木」に付け加えると「日本」になることが分かる。従って、主人公の「目木」という苗字には、日本を示唆する可能性を含んでいるのではないだろうか。もう一人の主人公・横山に関して、「君、ずいぶん大きな耳をしているだんね」[41]と目木が語っているように、その耳は非常に大きいのである。

「耳の価値」が掲載された56年では、世界を驚かせたソ連の政治運動の一つが、スターリン批判を掲げたソ連共産党第20回大会（56年2月24日）である。スターリンの独裁政権に対する批判を積極的に世界に発信したのがフルシチョフである。フルシチョフの耳が非常に大きい点は注目に値する。ノンフィクション・ライターとして有名なアメリカのジャーナリスト、ジョン・ガンサーは『ソヴェトの内幕』でフルシチョフについて、「フルシチョフは写真で見るほどぶ男ではない。確かに容貌はよくないが、一部の写真から想像されるような大きくてしまりのない、豚のような顔ではない。テレビで彼を見た人も本当の姿はつかめていない」[42]と描いている。ガンサーは「豚のような顔」という従来のフルシチョフの容姿に対する大

[40] 安部公房（1998）「耳の価値」『安部公房全集6』新潮社、p66
[41] 前掲書、p61
[42] ジョン・ガンサー著、湯浅義正訳（1958）「頂点に立つフルシチョフ」『ソヴェトの内幕Ⅰ』みすず書房、p91

衆の認識を否定している。しかし、ガンサーの評価は、逆に大衆が思っているフルシチョフの容貌が「豚のような顔」であるという通説を傍証したのである。従って、耳の大きい横山の人物設定の背後には、フルシチョフの面影が見られると言っても過言ではない。つまり、「耳の価値」では、目木と横山の二人のキャラクターを通して、日本対ソ連という構図を布置していると言えるだろう。

次に、「耳の価値」の粗筋から分かるように、この小説は不合理なプロットから構成されている。しかし、テクストを読み解く重要な手掛りは冒頭部分に示されている。その一部を以下に引用する。

> ある善良な大学生が、なにかのはずみで留置場にほうりこまれた。なぜそういうことになったのか、思い当るふしはぜんぜんなかった。おかしなことに、彼を捕まえた警官が翌日交通事故で死に、ついでに書類が紛失してしまったので、警察のほうでも分からないでいるらしい。[43]

引用の下線に示されているように、目木は「善良な大学生」として設定されている。しかし、この「善良」な大学生は、「善良」とした行為をしたことがない。学費滞納の通知を無視し、バイト先で個人情報を乱用し、保険金詐欺など、テクストで描写されている目木は留置場に入れるべき「不良」な大学生である。つまり、「耳の価値」のテクストには、現実の価値観とは反転する意味合いが隠されていると言えるだろう。例えば、次の箇所でもその反転性が伺える。

> その採用試験ってのがまた変っていたんだ。ワラ半紙に、『六法全書とは金もうけの手引きを書いた本である』というのと、『みだりな金もうけをとりしまる本である』というのと二行書いてあってね、正しいほうにマルをつけ、理由を説明せよとい

[43] 前掲 40、p58

うんだよ、そして、金もうけの手引きだって書いたほうの四人がとおった[44]

「六法全書」は法典として、「みだりな金もうけをとりしまる本である」のほうが正しいはずである。しかし、テクストでは、「金もうけの手引きを書いた本である」という反転した選択を正解としている。つまり、「耳の価値」のテクストでは、現実世界の価値観と反転する価値観の世界を構築していると言っても過言ではない。

テクストでは、目木は横山を脅迫する同時に、経済的誘惑などの手段を通じて、横山の耳を負傷させることで保険金を騙し取ろうとすることが描かれている。アレゴリー的に考えれば、これは、日本（＝目木）がソ連（＝横山）を抑圧していると言えるだろう。しかし、テクストと現実社会とのモラルの反転性を考慮すれば、目木が象徴する日本が、横山が象徴するソ連に、逆に抑圧される現実的社会状況の可能性を暗示していることを看過してはならない。例えば、テクストの結末は示唆に富む。

さて、今度こそはと、誰かに押されたそぶりでまたよろめこうとしたとき、その押した男がふいに目木の腕をぐっとつかんで、同時に固い鉄の輪がカチッとはまった。[…]手錠をねじってのぞきこんできたのは案のじょう留置場の巡査だった。「すみません、ちょっと下の友達に話しておきたいんですが」「でたらめ言うな、本当の友達なら向こうからたずねてくるさ」[45]

小説の結末では、横山は語られることなく、目木のみが巡査に逮捕され、留置場に入れられたのである。換言すれば、目木に騙されて自分の耳を献身する横山は、逆に目木を再び留置場に入れるために設定された人物と解釈することも可能である。つまり、横山（＝

[44] 前掲 40、pp59-60
[45] 前掲 40、p68

ソ連）は、目木（＝日本）を抑圧する可能性を持つと言えるだろう。従って、本作の結末は、この時期の「国際派」から構成される共産党指導部が、ソ連の批判に対して妥協する姿勢を取る現実的社会状況を反映していると言っても過言ではないだろう。この結末は同時に、既に述べたように、「国際派」が掲げている反抗精神のない政策が導く日本社会の今後の可能性に対する安部の懸念を示唆していると言えるだろう。

5.　記号「K」の意味合いと日本共産党批判―「鏡と呼子」

「耳の価値」が掲載された時では、ポーランド事件やハンガリー事件はまだ勃発していなかった。本節では、東欧での政治事件の発生後に創作された「鏡と呼子」を通して、ソ連に対する日本共産党の政策を徹底的に批判する安部の思想を確認したい。

「鏡と呼子」は『文芸』の 57 年 1 月号に掲載された安部の短編小説である。辺境の村の学校に赴任することになる K が村に着くと、常に誰かに監視されていることに気付く。K を監視しているのは、下宿の主人・阿瀬宇然とその姉阿瀬トクである。二人は学校の校長に雇用され、村人の家出を阻止するために、全ての村人を監視している。K は村で家出を鼓動する組織を作ろうとするが、阿瀬トクは K の行動を校長に知らせる途中で交通事故に遭って亡くなる。阿瀬宇然は阿瀬トクの死後、村から逃走してしまい、そして K だけが下宿に残されているところで物語は結末を迎える。

「鏡と呼子」と同じ時期に刊行された『けものたちは故郷をめざす』と比較すれば、「鏡と呼子」は全く注目されていないと言える。しかし、本作は安部が東欧外遊を終え、東欧での一連の事件が勃発してから初めて書かれた作品である。従って、テクストでは、ソ連による政治的抑圧が全面的に表象されている可能性は高い。渡辺広士は早い段階からこの問題を指摘している。「鏡と呼子」は「耳の価値」と同じく 74 年に再刊され、共に新潮文庫の『R62 号の発明・鉛の卵』に収録されている。渡辺はこの文庫版の「解説」において、

以下のように述べている。

> 安部公房の小説の世界はすべて、ぼくらが日常やっている譬え話に具象的像を与えたものである。この本の十二編は奇抜で面白く、辛辣だが、寓話的な話の世界である。[46]

渡辺の話から伺えるように、「鏡と呼子」と「耳の価値」は共通する理由＝「譬え話に具象的像を与えたもの」によって共に収録されている。氏が語る「具象的像」とは、テクストで表象される「寓話的な話」と対照に語られているのである。従って、「具象的像」には、テクスト外部の社会的客観状況を指し示す可能性を持つ。東欧体験と関わる「鏡と呼子」と「耳の価値」において、テクスト外部の社会的客観状況を語れば、50年代のソ連とその衛星国との情勢、及び日本共産党の対応は必ず言及されると言えるだろう。

まず、「鏡と呼子」の主人公の名前が「K」であることは注目に値する。記号としての「K」は、安部の作品では良く見かける。例えば、初期変形物語の「デンドロカカリヤ」における「K植物園長」や、「闖入者」の主人公「K」などが挙げられる。キャラクターの名前として使われている記号「K」には、必ずしも記号内容に意義があるとは限らない。ただし、「鏡と呼子」における「K」には、フルシチョフを暗示する意味合いを持つと思われる。フルシチョフの姓名の英語表記は「Nikita Khrushchev」であり、「K」はフルシチョフのイニシャルであることが分かる。また、フルシチョフは作品の中でも「K」と呼ばれたことはある。アレクサンドロフの『フルシチョフ』ではフルシチョフのことを直接「K」と記している。

> 全世界をたえず旅行してまわり[…]さかんに民間の諺を持ちだしたりして、《K》氏の重要さやその光彩陸離たる存在は大

[46] 渡辺広士（2017）「解説」『R62号の発明・鉛の卵』新潮社、p356

部分の他の現代政治家たちの影を薄くしてしまっている。[47]

自伝的性質を持つアレクサンドロフの著作の序文に書かれているように、フルシチョフは「K」と呼ばれている。つまり、「鏡と呼子」は、当時のソ連の最高指導者を示唆的に描く点において、「耳の価値」と共通している。但し、「鏡と呼子」が刊行される前、ソ連の政治的抑圧とその抑圧に反抗する民衆の運動が実際に発生しているため、こうした矛盾をネガティブに評価する日本共産党指導部に対して、安部は「耳の価値」より、一段と猛烈に批判している。

> この村には、一種の思想的な病気がはびこっているんですよ。極端な猜疑心と言ってもいいですね。[…]校長は、亡者どものこういった心理を、家出という表現で、ぴたりと集約したんだと思うな。やはり、ちょっとした政治センスだと思いますよ。[…]われわれはもう、あんまり知りすぎてしまいましたからね。家出に本当の価値をみとめ、それを心から宣伝することなんか、とてもできやしない。このごろじゃ、いわゆる進歩的な教員たちのあいだでも、家出否定論の傾向が強いらしいですよ。[48]

引用に描かれているように、校長は家出する者の悲惨なイメージを作り出し、こうした虚構なイメージを村人の間で共有させている。校長の手段によって、村では「猜疑心」という病気が流行し、最終的に、校長は村人の内面に起きている「猜疑心」という病気を利用して、村人の村からの脱出を阻止することに成功したのである。こうした巧みな手段が機能することによって、村人だけでなく、外部から学校に赴任する知識人でさえも、「家出否定論」を支持するようになり、村では家出が抑制されたのである。

以上述べてきた村での状況は、ソ連共産党第 20 回大会以降、ソ

---

[47] ビクター・アレクサンドロフ著、杉山市平訳（1958）「序文」『フルシチョフ』平凡社、p1

[48] 安部公房（1998）「鏡と呼子」『安部公房全集 6』新潮社、pp290-292

連による独裁体制に反対して、自由や民主主義の体制を確立するための革命が相次いで起きている現実の東欧情勢と合致する。ソ連共産党第 20 回大会の影響で、56 年 6 月 28 日にポーランドでポズナニ事件が起き、この事件をめぐって、ポーランド政府とソ連の間には確執が生じ、ポーランド国民はソ連の支配から脱退を要求するように至った。ポズナニ事件に相次ぎ、同年 10 月にハンガリーで動乱が勃発した。ハンガリー動乱は、ソ連の支配に対するハンガリー国民の反抗運動であり、国民は自ら本国の政策を実施するために、ソ連に反抗したが、最終的にソ連が軍事介入することによって、動乱は鎮圧された[49]。こうした東欧の社会情勢は、村人における家出と、村人の脱離を監視することで共同体を強制的にコントロールする校長の行為と非常に似ている。つまり、「家出」はソ連の政治的抑圧に対する民衆の反抗という現実的意味合いを示唆していると言えるだろう。ソ連に反抗する衛星国家の行動に対して、安部は支持していると既に前文で論じた。注目に値することは、「鏡と呼子」では、校長の監視への対応をめぐって意見が分かれる点である。

「喧嘩だなんて、そう大げさに言われちゃ困るな。ほんの個人的な問題だったのですから……でも、そこまで分っていて、なぜ君たち自身が改革しようとしないんです？」

「改革？……何を……？」

「だって、いままで君は、その話をしていたんでしょう？」

「いや、別に改革したいと言ってるわけじゃない。[…][50]

引用に示されている通り、「K」は家出を鼓動しながら、村全体を巻き起こす暴力的な革命を起こそうとして校長に対抗しようとしている。しかし、学校の教師は「進歩的な教員」として、「家出否定論」

---

[49] 小島亮の『ハンガリー事件と日本：一九五六年・思想史的考察』（現代思潮新社、2003）を主に参照した。

[50] 前掲 48、p287

の傾向が強いため、村で暴力的な革命を望んでいない。50 年代の東欧で勃発したソ連の衛星諸国による一連の事件は、スターリン時代の独裁体制から民主主義の体制を確立しようとした改革を意味すると、安部は考えている。安部はこうした改革を「プラスの矛盾」と称し、その対立からエネルギーを期待していた。しかし、当時の日本共産党では、「国際派」が権力を握り、東欧における一連の矛盾やソ連の弾圧をネガティブに評価している。安部と日本共産党との確執は、正に上記の引用に描かれている「K」と教師達の意見が相違するプロットと一致する。こうした共産党の政策に対する安部の批判的思想はテクストの言説から確認できる。

> たとえば同僚をたずねるときは、なるべく月のない暗い夜をえらび、親しいもの同志でも、つれだっては歩かず……むろんこんなことは、なんの役にも立たないことだけど[…][51]

引用は、K の提案を表面だけ支持する学校の教師の行動を語っている。下線に示されるように、学校の教師は夜にしか集合できず、昼間では共に歩くことさえできない。恐らく、上記の言説は当時の東欧事件に対する日本共産党指導部の「国際派」の気弱な対応をアイロニカルに表象していると思われる。そして、「なんの役にも立たない」のが、日本共産党における対立意識を持たない政策に対する安部の返答と言えるだろう。

6. おわりに

本稿は、安部公房が 50 年代後半に創作した諸作品に焦点を当て、安部の日本共産党への懐疑と、彼が抱き続けてきた対立意識がテクストで如何に表象されたかを明らかにした。安部はアメリカを意識しながら変形物語を描いてきたが、ソ連が国際舞台でその影響力を

[51] 前掲 48、p292

拡大する中、彼はソ連を意識するようになり、とりわけ56年の東欧見学を通して、作品ではソ連を表象するようになったのである。

東欧に滞在した安部はその実体験を基に数多くのエッセイを書き、そのエッセイから、安部の日本共産党に対する懐疑が伺える。東欧外遊後、ポーランドとハンガリーでは動乱が起き、日本に戻った安部はこうした政治事件に触発され、今まで書き上げたエッセイを改訂して、単行本『東欧を行く』を出版した。本作において、安部は東欧で実感した排外性を持つ民族主義に関心を寄せ、東欧での政治事件を高く評価している。こうした記述の背後には、ソ連の政治的抑圧への日本共産党の政治方針に対する安部の懐疑的思考が隠されている。安部はソ連の政治的抑圧の必要性を強調し、ソ連の抑圧と民衆の反抗との衝突によって生まれるエネルギーを期待しているが、日本共産党は矛盾の機能を否定したため、そこから安部と日本共産党との確執が発生するようになったのである。

こうした対立意識と深く関わる安部と日本共産党との確執は、エッセイだけではなく、東欧滞在中に掲載された「耳の価値」と、東欧外遊後に初めて書かれた「鏡と呼子」と言った小説作品においても伺うことができる。「耳の価値」では、ソ連に対する日本共産党指導部の妥協的な態度について、安部は、キャラクターの象徴性とテクストの反転性を通して自分の配慮を示した。「鏡と呼子」では、東欧での政治事件と非常に似た出来事がテクストに投影され、キャラクターの革命に対する意見の分裂は、現実の安部と日本共産党との確執を表象しているのである。本稿は、安部と日本共産党との確執を究明することによって、安部が「抑圧」を余儀なくされた世界における今後の小説形式の展開にとって、未だに重要な意義を持ちうる作家であることを実証する点に意義が見られる。

〈付記〉本稿は、2017年11月24日に行われた「2017年台湾日本語教育国際シンポジウム」で発表した「安部公房「耳の価値」、「鏡と呼子」、『東欧を行く』研究―「抑圧」と「経験」をめぐって」に筆を加えたものである。

参考文献

著書：

ウィリアム・カリー著、安西徹雄訳、1975 年、『疎外の構図—安部公房、ベケット、カフカの小説』、東京、新潮社

苅部直、2012 年、『安部公房の都市』、東京、講談社

木村英亮、1991 年、『ソ連の歴史—ロシア革命からペレストロイカまで』、東京、山川出版社

小林良彰、1971 年、『戦後革命運動論争史』、東京、三一書房

小山弘健、1966 年、『戦後日本共産党史』、東京、芳賀書店

高野斗志美、1979 年、『増補　安部公房論』、東京、花神社

田中裕之、2012 年、『安部公房文学の研究』、大阪、和泉書院

デーヴィッド・コッツ等著、角田安正訳、2000 年、『上からの革命：ソ連体制の終焉』、東京、新論評

鳥羽耕史、2010 年、『1950 年—「記録」の時代』、東京、河出書房

波潟剛、2005 年、『越境のアヴァンギャルド』、東京、NTT 出版

日本共産党中央委員会、2003 年、『日本共産党の八十年—1922~2002』、東京、日本共産党中央委員会出版局

論文：

杉浦晋、2004 年、「石川淳、日本共産党、そして安部公房」、『國學院雑誌』、第 105 巻 11 号、東京、國學院大學綜合企画部

日高昭二、2004 年、「幽霊と珍獣のスペクタクル—安部公房の 1950 年代」、『文学』、第 5 巻 6 号、東京、岩波書店

山田博光、1979 年、「安部公房論序説—リアリズムと共同体—」、『帝塚山学院大学研究論集』、第 14 巻、大阪、帝塚山学院大学研究論集編集委員会

渡辺広士、1972 年、「安部公房と共同体」、『國文學　解釈と教材の研究』、第 17 巻 12 号、東京、學燈社

ゴーシュ・ダスティダー,デバシリタ、2005 年、「死者の語りという戦略—安部公房『変形の記録』論」、『日本語と日本文学』、第 40 号、東京、筑波大学日本語日本文学会